

読書日記

今週の筆者は
上田紀行さん

文化人類学者
上田紀行さん

*3月19日～4月15日

1960年代の九州、創設されたばかりの高専で、ものすごい国語教育が為されていました。高専とは高等専門学校、口ボコ人氣で一般にも広く知られるようになった、理工系バリバリの5年制の教育機関である。「キュリー夫人伝」に始まり、矢内原忠雄の「余の尊敬する人物」、夏目漱石「三四郎」、杉田玄白「蘭学事始」「幸田露伴「五重塔」、福沢諭吉「福翁自伝」、島崎藤村「破戒」等々を名物教師が読み聞かせをする。中学を出ての若者たちはその名詞子に魅了され、本の世界に吸い寄せられていく。学生たちはむさぼるように本を読むようになり、図書館のほとんどは本は貸し出し状態になるのだった。

にわかには信じがたい話だが、実話だ。この名物教師の名前は棚町知彌、そしてその教え子によるこの評伝が明らかにする彼の人生は美に波瀾万丈、面白さに満ちている。そもそも学生たちの自由な魂を呼び覚ました人気教師は、学生運動の季節となると、運動部ぶりで学生たちを深く抑圧する側に回り、あまりの失望させる。しかしその後新聞記者となつた著者の池田知



振れ幅の大きな「名物教師」

この振れ幅がすごい。エリート軍国少年、数学科「出征」、GHQ検閲局勤務、演劇誌創刊、「国文科入学」……。日本人は「目の前の当面のこと」に全力あげてとりくむのが私の悪いクセ」と言っているが、それにしても、

そして工業高校に国語教諭として着任し、61年に高専制度が発足すると高専教員となり、徹底した読書による教養教育を開始した。さらに学生紛争後は、高専の教育改革に没頭する。アメリカ工芸教育学会で「工芸教育とは技術を

うえだ・のりゆき 東京工業大リバーラルアーツ研究教育院長「著書「生きる意味」」
各氏です。

らの交流から生まれたのが「読書と教育」だ。
棚町の父は戦前の「思想検事」政府に反対する者を徹底的に弾圧する職務であり、大本教の彈圧の中心人物でもある。その息子の知彌はエリートとして育ち、典型的な「皇國少年」の優等生として旧制高校の卒業式でも総代となる。

さて44年に北海道大学数学科に進み、役場から理学部の学生は徵兵猶予と言われたの父は既に亡くなり、家族を養わなければいけない。そこで民衆の旺盛な演劇活動に感動し、演劇誌を自ら創刊。検閲局が廃止されると、米系石油会社に勤めながら九州大の国文科に入学して、近松文

までの軍国青年が英語の能力を活かして米軍に、それも検閲官として採用され、もっぱら演劇を検閲した。ところがそれはまさに國のために死す選択だったが、生きて復員する。父親は既に亡くなり、家族を養わなければいけない。そこで民衆の旺盛な演劇活動に感動し、演劇誌を自ら創刊。検閲局が廃止されると、米系石油会社に勤めながら九州大の国文科に入学して、近松文



■ 読書と教育 戰中派ライブラリアン・棚町知彌の軌跡（池田知隆著・2019年）

現代書館・2160円
名作を読み聞かせ、生徒を本の世界へいざなった伝説の教師の評伝。読書が人生に与える力を知る。